

## やまがたの感動発掘を求めて

雑誌「もっと、奥の細道」発行人編集長  
「山形県どんぐり2000年の森をそだてる会」事務局長

居鶴弥太郎

三年前、宮崎県で開催された地域づくりの全国大会で、私はどんぐり（広葉樹）の植樹運動を知った。会場で作りのどんぐり会員証を見たときの、あの感動は今でも忘れることができない。受け継がれてきたふるさとの自然を思う心と、それらを残そうとする郷土愛は人間本来の原点でもある。二番煎じと言われてもいい。さっそく山形でもどんぐり（広葉樹）の植樹をはじめようじゃないか、と思い立つ。その時私自身、山形県でのボランティアやNPOの色々な活動が広がるにつれ、団結することへの難しさを感じ、みんなが出来る共通の運動というものが無いのか探していたのだった。ただ、宮崎方式には物足りなさを感じ、子どもたちを何とか主役に出来ないだろうかと考え始めた。

環境問題、ワークシヨップといっても、一番懸念されるのが子どもたちが山や川で遊ばなくなったり土離れではないかと思っただけである。エド機器、映像や疑似体験ばかりを追い求める子どもたちが増え、自然のなかで自分の手と足や五感を使うことが失われようとしてはいないのか。

こんな背景から賛同者を少しずつ募り、検討を重ね、さまざまな方に協力ご指導をお願いして、ようやく発

足したのが、山形県どんぐり二〇〇〇年の森をそだてる会（大川健嗣会長）である。発足以来、一株千円の株券を発行して、これまで日本財団や国土緑化推進機構などの助成金を頂いたり、米沢市の御成山への植樹、天童市の山口小、田麦野小さんのご協力によるポット栽培を実施してきた。来年度は、最上地区の小學生にポット栽培をお願いして、山形市の馬見ヶ崎周辺や、東北公益文科大学、東北中央自動車道天童インター周辺への植樹などを予定している。植樹の際に、その地域特産の具の入った鍋を囲み、ごみや空き缶のポイ捨て、不法投棄、広葉樹の効用などのミニ講演会なども一緒に行っている。最近、各地の漁民の方々の植樹活動も話題になっているが、美しいどんぐり（広葉樹）の森やブナの原生林を守り育てることは、きれいな川や格好な漁場をつくりだすことにもつながり、今後県民ネット最上川さんや魚連、その他各地で植樹活動を行なっているグループの皆さんと連携していく必要を感じているところである。

雑誌『もっと、奥の細道』は、この三月で第七号をむかえた。ふるさと山形の感動の発掘をコンセプトに、古から研ぎ澄まされてきた素晴らしい風

土、文化や歴史をもう一度再認識しようと発刊されたものである。（四月から季刊誌に移行）

雪国でもあり、全国で最も四季がはっきりしている、やまがた。日本一種類が豊富な果物、山菜。米も肉も一級品の、食の王国やまがた。こんな恵まれた風土を当たり前のこととしか思わず、案外見過ごしているものが多いのが山形県人なのではないかという、ごく素朴な疑問をきっかけにこの雑誌は生まれたともいえる。

秋田・山形を知る山岳家いわく、白神よりも飯豊朝日の方がブナの原生林ではずっと格が上で、二倍の面積だと、世界遺産などともてはやされて、山形県人は悔しくないのか。鋭い指摘に頷く私と、やまがたの隅々まで取材で回れば回るほど知らないことが多いと言っては、やまがたの良さに打ちひしがれる我がスタッフ。『もっと、奥の細道』は、そんなデリケートな感性で、知る人ぞ知る名物、達人、グルメ、活躍する女将、こだわりの地酒やお店、ちょっとした話や漬物名人など、お茶を啜りながら気楽に読める、心が温まるような話題を一杯提供していきたいと思っっている郷土誌である。